■大きな違ひ

最初から漢字で学習させますと、その言葉は漢字と連合し、一体となって記憶されますので、その言葉を表記しようとする時には、その言葉と一体となって記憶されてゐる漢字が自然と頭の中から出て来るので、それでかなで書くことが無いのだと思はれます。

だから、頭の中で言葉と一体となってゐる漢字が頭の中から出て来ない場合でも、必ず先生に教へて貰ふか、自分で調べるかして漢字で書かうとしたのでせう。かなで書いたのではその言葉を書いたとは思へないのだと思はれます。

これに対して、最初かな表記で学習した子供たちにとっては、「先入、主となる」の道理で、言葉がかなと連合して、後から学習した漢字はその蔭に隠れてしまひ、なかなか出て来ないのだと思はれます。

つまり、「漢字は画数が複雑で書くのが煩(わずら)はしいから使はない」といふやうな意識的なものでは無くて、かな先習に依る習慣の所為(せい)であり、無意識的な行為のやうに思はれます。だから、矯正(きょうせい)することが困難なのであって、それで先生たちが悩むわけです。

更に困った事には、「書ける漢字を作文に使はない」といふ事は、「書ける漢字でも、長く使はないでゐる為に忘れてしまひ、本当に書けなくなってしまふ」といふ結果をもたらすことです。

実はこれが「漢字学習に先生も子供たちも大変な努力をしてゐるのにも拘(かかわ)らず、なかなか力が付かない」一番の理由では無いか、と私には思はれるのです。これは、書き取りテストに依る練習などで解決できるやうなものでは無いと思ひます。

最初から漢字表記で学習させて置きさへすれば、譬(たと)へその漢字を忘れて書けない場合でも、決してかな書きで済ませようと思はず、必ず教はるなり調べるなりして漢字で書かうと努めます。この態度が大切なのです。それは、今は書けなくても必ず書けるやうになるからです。

これは「今は書けても、使はない為に忘れてしまって書けなくなる」かな先習の子供たちに比べてみますと、大変な違ひであることが判ります。だから、「最初から漢字で教へる」といふ事が肝腎(かんじん)なのです。